

---

# 反比例のブローケン

透明 ?

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

反比例のブローケン

### 【Nコード】

N8024Y

### 【作者名】

透明？

### 【あらすじ】

西暦2060年。二年前の「落星事件」で首を絞められる世界の中、国立魔道学院に所属する「傘卸怜羅」という少年と、原初携帯型魔力処理変換装置『反比例のブローケン』を軸にして回る物語。処女作なので、温かく見守ってくれと有り難いです。

## 第一話 国立魔道学院（前書き）

処女作なので、温かい目で見守ってくれと有り難いです  
、  
）  
・

## 第一話 国立魔道学院

工場の煙突から洩れる煙と同じ色の空の下。血生臭い森の中で、黒い感情に囚われながら走る少年がいた。

黒を基調にし、白いラインと灰色の模様が入った制服のようなブレザーと、同じ様なズボン。まるで、学校からいきなり戦争の渦中へ放り投げられたような服装だった。学校の帰り、友達との寄り道。数分前までそんなことをしていたような。

しかし、そうでない事は、彼自身がその表情で語っていた。

「目標の位置を頼む」

『南西二十メートル！ 私も飛び込む。挟み撃ちにして一網打尽にするぞ！！』

挟撃を仕掛ける。耳に当てた通信機のスイッチを切り、集中しながら回りの気配を感じ取る。

次の瞬間、彼の左手には巨大な剣が握られていた。純白の歪なフォルムをしたソレは、少年の腕をみしめし鳴らしながら持ち上げられる。

刹那の間に、黒い漆黒の影が木々の間を縫う様にして、少年に向かって飛びこんできた。鋭利な眼光と気持ち悪くうねうね動いている何本もの触手。とても生き物とは思えない。百以上の汚い触手は渦巻きながら空気を蹴り、本体を加速させる。

「そんなくらいはちょちょいのちょいってか……」

憎らしそうに笑い、額の汗を無視しながら左手の剣を引きつつ左

方へ飛び込んだ。無茶苦茶な動きに体が軋むが、その程度で弱音を吐いてられない。

もう、この戦場へ派遣されたの中で生き残っているのは、は自分とさっきの少女だけなのだから。みすみす呆けながら心臓を一突きにされてたまるか。

幾つもの触手を従えた化け物は、地球の重力を無視しながら木々を押し倒して停止する。どんな質量を持っているのか調べてみたい所だが、残念ながらそこまで見確認生命体とやりに執着する意思はないし、そんな余裕を持って戦える相手ではない。

不意に、化け物の後方から人影が見えた。

ゆらり……と光を弾く刃が、軌跡を残しながら化け物の頭部へ向けて滑る様に薙ぎ払われた。空気を切り裂く音に反応した化け物は、その斬撃を落ちる葉の様な動きで回避した。

だが、攻撃はそれだけで終わらない。終わらなかった。禍々しい、見ているだけで鳥肌が立つ様なその頭を、白い肌を持つ腕が驚掴みにした。

ぐちゃり、と音が鳴った様な気がした。それが手の主から発せられた物なのか、それとも怪物の頭が鳴らした音なのか。今は判断できない。

怪物の向こうには、紫色の長い髪を揺らす少女の姿が在った。唯一自分以外の生き残りで在り、先程の通信相手だった少女だ。

「やれえー!!」

幾十、幾百の触手が少女の体に巻きつこうと伸びる。あの化け物が何をしようとしているのか。彼女に対して、何をするのか。

次々と殺されていった仲間の死に際を思い出して、少年は絶叫した。今にも彼女を取り込もうとする化け物。赤々しい、体表に浮き出た内臓と同じ色の怪物。

その頭部。脳天に、長い長い白刃が突き立てられた。

いつからか、時間の流れに沿って『魔力』というエネルギーが流れ始めた。それはとても純粋なエネルギーで、尚且つ繊細。そして、その『魔力』を観測出来る者、操作する者も現れ始めた。それが、この世界に置ける『魔導士』の定理である。

「怜羅さん！ そっち行きました！」

さざ波が合唱する浜辺。過度に柔らかい砂が足場を崩す中、十六歳程度の子供がその外見に似合わない双銃を構えながら、腹から声を出して共に戦っている仲間へ警告をする。彼とその仲間を挟む間には形容し難い化け物が。

回転木馬の様にぐるぐる回る三つの巨頭と、クジラみたいなずっしりした体。全長はおよそ五メートル。実際のクジラと比べるとかなり小さいのだが、当然それに比例して気持ちの悪いくらい素早い動きをしよう。

待ち構える少年は右手に三メートル程の剣を構えており、半開きになった鋭利な瞳で敵を捉えていた。

「戦い始めてどれくらい経った！」

「一時間程かと！」

道理で軽い訳だ……。

無表情のまま両手で重さの感じられない剣を握り締め、突進してくる海の怪物に向かって滑る様に剣を走らせる。

「斬るぞ！ 伏せろ！！」

「?!」

くるりと一度回って勢いを付け、剣と呼ぶにはあまりにも歪なフ

オルムをしたそれで、思い切り怪物を薙ぎ払った。斬撃は空気を切り裂き、怪物の頭を木っ端微塵に叩き割った後も、その衝撃は海を叩いて砂浜を爆発させる。

純白の剣は、少年の手の中で淡く輝いていた。

「今日も大活躍でしたね、怜羅さん」

「お前も頑張っていたじゃないか。俺一人でどうにかなったとは思えない」

「冗談は止してください。僕なんて、二年前のときは震えながら引き籠ってたんですよ？」

そうか、と呟き、少年は懷から携帯電話を取り出した。スライド式のそれを開き、画面に撮った映像を確認する。

そこには、先程打ち倒した怪物の上で怯えながら体操座りをしてい、隣を歩く少年の姿が。これを撮らなければ、彼らの目的は果たせない。いや、『この怪物を倒した』という証拠があれば何でも良いのだが。

「カリキュラム完了には証拠写真、か……」

この世界には、非科学的な力が存在する。それはとても綺麗で残酷な力。魔力と呼ばれるその力の源は、かつて未来から流れ始めた結晶だと、どこかの学者さんが言っていた。

時間と一緒に過去へ流れるので、普通はこの世界で物理的に捉える事は出来ない。それを掴む普通でない人間が魔導士と呼ばれるの



だ。

そして、彼らを魔力が上手く扱える優秀な魔導士にするために設立されたのが、国立魔導学院。魔力の使い方、応用方法、転用等々、多岐に渡って生徒たちに学ばせている。

それなりに高いレベルの勉学も学べるため、魔力を扱える者ならば大体がここへ入学する。入試は確か、「初期魔力操作率」というパラメーターで判断しているらしいとか。ランクはE〜Sに分かれ、最下層から一つ上の「D」から入学許可が下りるのだった気がする。最も、高い勉学を学べるのは主に「B」か「A」か「S」で、クラス分けにした時にその差に歴然とするだろう。だから、ランクが低く、しかし高い水準の勉強をしたい場合には入学をキャンセルする者もいる。まあ、賢い判断と言えよう。

そして、現在彼ら二人が行っているのが学院の「カリキュラム」。学院側から流れて来る「依頼」を実習の一環として処理し、その完了報告を学院側が確認した後に依頼主へ届け、報酬金を学院が受け取る。生徒が貰えるのは確か……二割だったか？

最初にこの制度を見たとき、担当者の前で正直に「ケチだな」と口走ってしまったのを覚えている。

「何はともあれ、これで実践体験は終わった訳だが……どうだ？ 慣れたか？」

「す、すいません……流石に一度では……」

申し訳なさそうな表情で頭を下げる少年。だが、もう一方の彼は別に気にするな、と言いながら空を仰いだ。

「にしても、ウチの学校も面倒な機関を作ったモンだなあ……  
教育養成委員つてさ……」

「そうですね、か……？ ぼ、僕にとっては、身近で『傘卸怜羅』かきおろしれいらの

戦いを見られるっただけで、とてもためになるんですけど……」

緊張の色がくつきり見えるその喋り方をゆったり聞きながら、ぼんやりした瞳で曇り空を見上げる傘卸怜羅。瞳は濁った空を映していて、その向こうではいつも人が知れない記憶が渦巻いている。

「こんなチャランポランでも、役に立ってるならいいけどさ……」

一人の女子高校生が、机に頬杖を突きながらカーテンの隙間から校門の近くを覗いていた。そこには、黒髪の少年が長い鞘を右手に持ったまま歩いている姿が。隣には女装をすれば看板娘にできそうな容姿をした、茶髪で小柄な少年もいる。

彼ら二人は、今年できた「教育養成委員」という特別機関に放り込まれた生徒たち。名前は『傘卸怜羅』と『パレスィドルフィン』。両者共々授業への参加は自由で、その代わりに最下層の生徒や問題児等々、逸脱した生徒を担当させられると聞いた。

傘卸怜羅については語るべき個所が多すぎる。二年前の『事件』といい、魔力掌握量といい、確かに普通の生徒として扱うには多少浮き過ぎている存在だ。

パレスィドルフィンの方は普通授業の教育過程が終了していて、魔力操作についてはそこまで優秀な成績は納めていない。寧ろ平均以下というべきか。恐らく、傘卸怜羅に任された最初の問題児なのだろう。

「随分余裕ですね、詩桜<sup>しおう</sup>琴音<sup>おと</sup>さん？ そんなに窓の外の英雄が気になるかしら？」

「ええ。私のフィアンセですから」

長く綺麗な黒髪を持った少女は、苛立ちの表情で貧乏ゆすりをしている教師の方を見向きもせず、校庭のど真ん中を突っ切って歩く二人を眺めている。視線は真っ直ぐ長剣を持つ少年へ突き刺さっていた。

「彼の妻を名乗るほどの女性なら、教科書にある項目一つくらい、暗記してしまっている筈よねえ？」

嫌らしいだのなんだのとどよめく教室。そんな中、彼女はス

と滑るように立ち上がった。その手に教科書はない。机の上に開いてもない。見せつける様に目を瞑り、小馬鹿にするような表情で語り始めた。

「PICとは、魔力を物理的に世界へ干渉させるための携帯型魔力処理変換装置であり、様々な型が存在する。二年前の『落星事件』によって戦場へ送り込まれた人間には、ワンオフのPICが持たされ、それ以降特注でPICを注文する客が急増した。今では『魔導学院』に所属する殆どの生徒が個々のPICを渡されるようになった」

「よ、良くできました……」

たじろぐ教師に向けて、「ふん……」と鼻を鳴らしながら見下す様な視線を向ける琴音。しかし、そこは教師。いくら彼女が優秀な

生徒といえど、教師を卑下にすることはあつてはならない。

「では『初代試作型三十機』については？」

苦し紛れの言葉に、詩桜琴音は顔色を変えるところか、視線すら向けずに、

「現在我々が使用しているP I Cの大半を占める起源となった、三十基の試作P I C。落星事件で殆どが失われ、残っているのは刀剣型の『反比例のブローケン』、『比例のカイヤナイト』、機銃型の『回転木馬のフランクス』のみ。これで満足でしょうか？」

正午の境目に、傘卸怜羅は食堂にて、鞘に納めた剣の手入れを行っていた。いや、手入れと言うよりはシステムチェックというべきか。二年ほど前からずっと酷使しているような物なので、そろそろガタが来てしまうのではないかと心配なのだ。

彼の目の前には何枚も重ね建てられた皿がある。全て等しくとある食べ物を乗せていた物であり、全て怜羅が胃袋に放り投げてしまったので、次は皿が厨房に放り投げられるのを待っていた。

「本当偏食ですよね。それ以外食べている所を見た事がないです…」

「ちゃんと寮じゃ栄養のあるもん作って貰ってるよ」

最後に残った一つを、バリバリと噛み砕く。赤みのあるソレは、見ただけでどんな味なのか察しがついた。

「さて、と……………そろそろ報告してくるか。依頼完了しましたってな」

「あ！　ぼ、僕が行きますよ！」

ガタガタツ、と椅子から腰を上げるパレス「ドルフィン」を、首を振りながら椅子に座らせる。

「お前はまだ昼飯残ってるだろ？　俺が行くよ。終わったら展望室に行くけど、午後の授業は？」

パルスが首を小さく振ったのを見て、怜羅は「んじゃ後でっ」とだけ言い残し、自らの身長と同じかそれ以上の長さを持つ剣を手にして、そそくさと食堂を出て行ってしまった。

ポツンと淋しく一人広い食堂に残された少年は、ずずず…………と細長い麵をすすっていた。

校長室と札が貼られた異質な扉。まるで何重にも鍵が設けられた堅牢な門のような雰囲気を感じさせるその扉は、ドアノブを回して押せば簡単に開いてしまう。

その奥には大きなデスク…………ではなく、ミラーハウスのごとく幾

つもの液晶画面が壁に敷き詰められていた。天井や床にも、一体何を映し出しているのか。ふと目に入った画面には五年前に起きた戦争の最前線が映し出されていた。一体どういう手を回したらこんな動画が手に入るのだろうか。

「やあ。どうだい、私の孫の具合は？」

そんな趣味の悪い部屋の中心で、王様気どりで高い椅子に座っている老人が、部屋の入り口付近に立つ傘卸怜羅に尋ねた。

彼は今、目の前に踏ん返り返っている老人の孫の面倒を見ている。そう、パルス＝ドルフィン。あの少年がこの学院の理事長である『ミリオン＝ドルフィン』の孫息子なのだ。

「今から磨けば幾らだって光る。俺みたいに錆び付いちゃいけないからな」

元々雰囲気からして武功のために戦いを学ぶ人間だとは思えないのだが、それでも才能は秘めていた。神様は見た目と才能を比例して与えないらしい。反比例なんて世界に山ほど溢れている。この剣だって、その一つだ。

「ほら、今日お孫さんと一緒に仕留めて来たクジラもどきだ」

「なんだ。わざわざそれを届けるために来たのかい？ 対応部署に送ればいいと、生徒証にも記していた筈だが？」

「あいつの近状報告をしろって言ったのはアンタだろう………全く。老人は物忘れが激しいから困る」

「先人を馬鹿にしてはいけないよ」

「二年前。事件に立ち向かわず、子供だけを戦いに送り込んだ臆病者の言う事かよ」

「ロクに動けない人間は、後方で指揮を執るのが無難なのだよ」

「あいつが目を覚ますまで、俺はアンタらを許さない」

納得していない、というより、どこか憎悪の混じった怜羅を見て、ミリオン＝ドルフィンは見降ろしたままの姿勢で不敵に笑った。全てを見透かした様なその目を見て、一層敵意を増す……と思いきや、一度溜息を吐いて半開きのどうでもよさそうな目に戻ってしまった。気の抜けたその眼差し。

「邪魔したな……」

「いやいや。また来てくれたまえ」

樹海や雑木林に包まれたこの学校は、一つの島の中心部分を丸ごと斬り抜いた様にして建設されている。

日本の各港から船が出ており、特に四月になると、新入生が入ってくる事もあって運行頻度が高くなる。

幾つも滑走路を造る程土地も残っていないので、唯一設けられた空港は専ら外交専用になっていた。

「今日も行ったり来たり、本当飽きないよなこの学校……」

「優秀な魔導士になりたい人たちは、皆この学校に来ますからね……。そろそろオープンスクールですし」

「まだ九月だつてのに、受験生は忙しいな」

そんな風に、いそいそと空港で働く業務院たちを高めから見物しているのは、二十代後半ほどの髭を生やした男性だ。その隣には、紅茶を啜っている十七歳程度の少年が。彼の背中には折り畳み式の『PIC』が。外見からして、本来の姿はガトリング砲のような複数口連射砲なのだろう。

ベルトコンベアーの如く出ては入って、出ては入ってを繰り返す鉄の鳥達。そんな姿がとても現実味が無くて、よくまあトラブルが起きない物だと溜息を吐く。

「もう、あれから二年なのだな」

ふと、男性が口ずさんだのを聞いて、少年は少し思い耽るように苦笑いしながら窓の外を眺め続けていた。

「怜羅はまだ、彼女を待っているんでしょうかね」

「待つだろうさ。前も病院に行ったときに見かけたぞ。こっそり着いて行つたが、やはり必死に語りかけていたさ……」

「彼には本来、もっと行動圏を広げて欲しいんですけど……あなた方から何か頼めないのですか？」



少年が尋ねると、男性は無理無理と言わんばかりに右手を振って、回転式の椅子で窓から反対側に向きながら両手の指を絡ませた。

「私の様な大人が何を言っただって、彼は聞き入れてくれないだろうさ。あの苦しみを彼に与えてしまったのは、他の誰でもない。我々大人なのだからね」

「……………」

自嘲気味に天井を眺める男性を見て、少年は何も言わなかった。ただ、可笑しそうに苦笑するだけ。

しかし、男性はすぐさま表情を切り替え、デスクの上に両肘を突いた。どうやら本題に入るらしい。

「さて、今回は君に依頼があつてここに呼んだのだが……………引き受けてくれるかい？」

さつきとはまるで別人のように、仕事の顔になった男性。

この航空施設の管理者であり、統括する存在である『都海寛治』（とつみかんじ）直属の依頼とあらば、受けざるを得ない。少年はそうとだけ答えると、窓から離れ、ソファに腰を沈めながらティーカップをテーブルに置いた。

背中のPICは流石に邪魔になるので、隣に置いておく。

「内容は簡単だ。ギルティタウンから日本本島に、『リザルト』が上陸してしまったらしい。ソイツの駆除だ」

それを聞いて、少年は少し首を傾げた。

「確かに簡単ですが……………その程度なら、学院の上級生にでも頼めば

いいのではないですか？」

まるで自分が、自分より一つ上の生徒よりも優れているとも言いたげな台詞を吐く少年。しかし事実なので仕方ない。

「B級レベルの個体がD級と集団で乗りこんでしまったのだよ。普通の学生では対処できまい。教員も多くは派遣出来ないし、君か、はたまた彼に頼むしかないのだよ」

成程、と呟く少年。

『ギルティタウン』というのは、一年前にとある宇宙飛来生物、『アンノウン』の残骸から採取した特殊な細胞で実験を行っていた街である。丁度、この島から極端に長い橋で繋がっているらしい。

その街が正常に人間が住めていた頃、あそこでは丁度『P I C アンノウン』の細胞を埋め込む』という実験を行っていた。だが、中々上手くいかなかったので、痺れを切らした科学者が「P I C を生物に埋め込み、細胞と融合させよう」などと素っ頓狂を言い出したのが引き金。

何を思ってそんな事を行おうと思ったのか。当時、その科学者の助手を行っていた人間の最後の報告によると、

【彼は何かに乗っ取られている。あの生物は悪魔の呪いを持っているんだ。早くなんとかせねば、手遅れになる】

毎夜毎夜嫌な悪夢ばかりを見続け、心身疲れ切った所で、大事件が起きた。

例の科学者が提案していた実験が承諾されてしまったのだ。その時、彼はもう駄目だと決め付け、その島から逃げ出そうとしたらしい。

だが、間に合わなかった。

「実験は成功し、そして人類は大きな失敗をした。それがあの『ギルティフォールト』……地球の汚点だよ」

生命の美しい形を汚してしまった。作り出された得体の知れない生物はあつという間にその研究所を破壊し、その島に住む自然生物たちを捕食していった。そこからどんどん繁殖を進め、様々な怪物が生まれてしまったのだ。

これは一種の、生命の進化だと言う学者もいた。この一年で島のモンスターは植物や海洋類にも姿を変え、中には古代に絶滅してしまった『恐竜』のような姿をした物まで出現している。

島の中央には起源となった『原点』が今も息づいているらしい。姿を見たと言う人間は、ここの所見ない。

凶暴なモンスターたちには魔導士のように級が当てがられ、唯一の原点が『S級』と位置付けられているようだ。

島から外界へ赴くのは殆どC以下の下級レベルのモンスターのだが、時折上級の個体も島から出る事があると聞く。魔力を付与した攻撃でないと通用しないので、PICの流通していない地域に出られると厄介な事件になる事が多い。原点ほどでないが、先住生物を捕食し、時間を掛けて繁殖をしてしまう可能性だってあるから。

「雌を優先して排除した方が良さそうですね……孕んだ状態で上陸されて、卵搜索まで任されるのは面倒ですし」

「いや、卵の確認は普通の学生に任せるさ。幼生は殆ど戦闘力を有さない。一年生が一班赴けば済む事だ」

そう言うのと、男性は依頼内容を大まかに纏めた情報端末を取り出し、少年の方へ放り投げた。

少年がそれを受け取ると、そこから自動で目的地の立体映像が出

現する。

「ふむ……？　そういえば、何故航空関係者でしかないあなたが、こんな依頼を請け負っているのですか？」

「ああ。そこは俺の故郷でな。出来るだけ安上がりにしてくれと頼まれたんだ。報酬は俺が出すから、額の心配はしなくていいぞ」

そうですか、とだけ言うと、少年は機銃のようなP.I.Cを背負って、部屋の扉に手を掛けた。ガチャリとドアノブを回し、廊下へ続く扉を潜る。

「報酬は学食のランチ一週間分で良いですよ。では、失礼いたします」

ボタンと閉じるドア。遠ざかっていく足音を聞きながら、男性は笑う。

そして、クルリと鉄の塊が飛び交う空を窓から見上げて、呟いた。

「頼もしい限りだよ、『アンバー』レアベルト殿……」

## 第二話 十徳ナイフ

夢ってのは、どうにも見たい時に見られるようなヤワなものじゃない。

そう好き放題望み、見る事が出来るなら楽な話なんだが、それもそれでどうなんだろう？ 楽な方に転がりたいから、現実より夢の方が駐留する時間が長くなって、馬鹿みたいに毛布に包まる毎日になるのか？

なんたるぐうたら。憧れる生活ではあるが、残念ながら夢ってのは自分で覚める以外に、他人から布団から引きずり出されて引っ張られるって事もある。

ここで俺の理想な人生は終わりか。なんとも儚いな。下らないけど。

「やあ怜羅。今、暇かい？」

寝起きは、その瞬間に見た顔が可愛い女の子でもない限り、清々しい物ではない。

つまり、俺の昼寝は最悪の結末を迎えてしまった訳だ。金髪オツドアイの、俺と似た風貌の野郎がそこに立っていた。

「ムカつく顔を真昼間から見せやがって……」

「そう言っ腹が立つのは君だろう」

更に苛立たしい台詞を数珠続きにけしかけて来るこの少年の名は、

アンバーⅡレアベルト。失礼だろうが、とてもじゃないけど人間の  
名前とは思えないな。

偽名だとかコードネームだとか言われたって驚かない。レアベル  
トってなんだよレアベルトって。

「ここ暫く、依頼らしい依頼は受けてない。理事長の孫息子の面倒  
任されてるくらいだよ」

「へえ。結構面白そうな事してるじゃないか」

ソファの上で眠っている俺を見降ろした後、近くの椅子に座って  
悠々と足を組むアンババー。

そろそろパレスが帰って来るころだな。なんて別の事も考えたく  
なる。晩飯が何なんだろうな、とか。そういう日常的な事を一生  
考えて行けるほど、朗らかな立場じゃないんだけど。

そんな俺に、あいつは非日常を放り込んできた。

「依頼内容はリザルトの討伐。種類は翼竜タイプのD級が十匹。B  
級が二匹だ。報酬は貢献度分割で、振り分けは僕がする。場所は瀬  
戸内海にある無人島。出発時刻は明日朝六時。学院は休みだし、丁  
度良いだろう？」

軽々しくそう告げるアンバーの背中には、物騒なガトリング砲み  
たいな火器が折り畳まれてやがった。どうせならそれ使って一人で  
殲滅してこいと言ってやりたい所だが、ここは金欠を解決するため  
に参加した方が無難という物か。

奴の言う通りにほいほいと動くのは癪だが、これにパレスを参加  
させれば良い経験になる。C級をちびちび討伐するより、大物を苦  
労して討ち取る方が経験値が積めるだろう。

レベルアップ目指して、中ボス撃破に行きますかって訳だ。

「OKって顔してるね。それじゃ、移動に使う船の手配を行っておくよ。参加するメンバーは僕と君でも十分だが、そっちで追加を集めてくれても構わない」

「どうせ暇つぶしにしか過ぎない、っていうんだろ」

「君と会話するのは楽だな」

「当然だろ……」

腹の立つ笑みと共に、野郎は扉の向こうへと消えて行った。

なんて最悪な寝起きだよ。

「はあ……さて、どうすっかな……」

天井を見上げてみると、昼間なのに夜空が広がっていた。

これがこの部屋の特徴だ。昼だろうが夜だろうが、どこかの人工衛星から撮影した宇宙を映しているって。リアルタイムなのかどうかは知らんがな。

本題に戻ろう。

別に俺とアンバーの二人でだって、頑張れば何とかなるかもしれない。でも俺とあいつだと、補助系統の能力を持った人間がいないから、少なくとも骨の一本や二本折れちまう。

だから、ここは敵の動きを封じたり、防御壁を張れる優秀な援護魔導士が必要になる訳だ。

とすると、一体誰が適任か……。

前線に出て鉛玉撒き散らすタイプの人間が多いから……回復系統となると教師くらいにしか知り合いはいないし。

『何を迷っているの？ 私がいるじゃない』

ふわり……。

木の葉のようにゆらりとした声が、頭に流れ込んできた。  
誰だ、なんてあたふたはしない。だって知ってる声だから。

詩桜琴音。同級生の女子高生。以上。

『そしてあなたの許嫁、でしょう？ きちんと自分の嫁くらい紹介しなさい』

「誰にだよ。ってか、勝手に人の頭覗き込むの止めろよ……それに、今お前授業中じゃないのか？」

「もう終わってるわよ」

そう言って、彼女は俺の上に乗っていた。

急に姿を現した琴音は、まるで流れる音色のように髪を揺らしながら俺の腹部に重圧をかけ……。

「ぶほあ?!」

重い!! しかしそんな事を女性に口走るのは失礼極まりない!

「残念だったわね。心中吐露してるのと変わらないわよ」



結局オシオキ肅清を受けた……。

詩桜琴音。どこぞの富豪のお嬢さまで、学院の副会長に属する優等生。

所持するP I Cは「十徳の刀子とじす」で、有する能力は名前のまんま十個あるらしい。

それだけで卑怯だの不公平だのと神様に抗議したい所なのだが、その上能力が個々で人を見透かす様な物ばかり。

さっきのテレパシーっぽいのもその一つ。人の心を読むのもそうだ。

んでもって、姿を消すっていうチートくさいのもそれに該当する。先程急にあらわれたのはその能力を使ったからだろう。

心臓に悪いから心底止めて欲しい。

「そう。なら今度から気をつけるわ」

絶対に嘘だね。これ聞くの何十回目だと思ってんだよ。

『丸聞こえよ』

「一々頭ん中に声を配達しなくていい……」

数ヶ月前に聞いたのだが、どうやらこいつ、俺の頭の中はオート

で自分の耳に届くよう設定してあるらしい。すごく。本当にすごく真摯に止めて欲しいナンバーだ。

プライバシーもクソもないそんな能力を持っている彼女は、今日もテーブルに座り、俺を観察しながら無表情のままピクリとも動かない。

綺麗な顔立ちしてるくせに、もうちょっと笑えよ。

「いやよ。うつかり誰かが部屋に入って来たらどうするの。怜羅以外に私の笑っている場面なんて見せられないわ」

「だから人の頭を……もういいか……。それより、今日は生徒会室に行かなくていいのか？」

「あなたが私を必要としていそうだったから、今日は欠席よ」

「横暴過ぎんだろ」

とりあえず、女子が同行していたら余計気を回さなくちゃならないから、出来たら琴音サンは連れて行きたくない……。

そんな事を胸中で呟いている俺の顔を、彼女は真っ直ぐと綺麗な瞳で見つめていた。どうやらまだ頭の中を覗かれているようだ。

意識しなけりゃ表面上のぼんやりした部分しか読み取れないらしいんだけど、こうやって面合わせて目と目を合わせると、心の中で浮かべた映像、言葉の語一句まで正確に分かつちまう。

なんと恐ろしい力だ。間違いなく同居したくない人間ランキングで一位になるのだが、残念ながら俺はコイツと同じ寮の部屋に住んでいる。もう嫌だ……。

エロい事考えた時はどうなるかって？

従来、女性は将来を誓い合った男性が、自分以外の女の痴態を頭の中で妄想していたらどういいう行動を取るか。

いや、実際にそういう素っ頓狂な能力を持った女性は彼女以外に知らないんだけど、あいつの場合は調理中に手を滑らせる。この間は包丁の刃が腕を擦った。かさぶたになった。痛かった。

「別に、私を食べる妄想なら幾らだってしても良いのよ。おっきいバナナを食べさせたり、練乳を頭からかけたり」

「するかっ！」

身近にいつもいて、なおかつ頭の中を常時覗かれている訳だ。そんな女性をベースに、変態的衝動に駆られる訳にもいかんだろう。流石に度が過ぎていと言わざるを得ない。

「そういうのを世間一般では『ヘタレ』というのよ」

「犯罪者一步手前になるなら、俺はヘタれてるままがいい」

つか、いつまで変態談義に花を咲かせてるつもりだよ……………いや、花が咲くような内容ではないんだけど。

そもそも、あんな変態御用達みたいな能力を持っているあいつが悪いんじゃないか。思春期の中学生だったらとんでもない事になるぞ…………。

「あなたももう少し、思春期の中学生みたいに盛ってみたらどうなの？」

「お嬢さま雰囲気でありがとう。せめて成人してからそういう話を

しろ」

本題に戻るぞ。

とりあえずソファから立ち上がって、琴音の向かい側に座る。んでもって指に魔力を絡ませながら、机の上に置いた。

魔力は少し調整してやれば存続する。これ、テストに出るよ。いや、出た。

今決まっている事を机の上に書き記しながら、依頼内容をまとめていく。白い光が軌跡を残すその姿は、まるでグラウンドの上に白線を引いてるみたいだ。

「やっぱりあなたは優秀だわ」

「何が？」

「PICを介さず魔力を出力できる魔導士は少ない。ベテランや百戦錬磨だったとしても、魔力の本質を見抜けていなければこんな真似は出来ない」

「お前も出来るだろ」

「当然よ。あなたの許嫁なのだから」

「その理屈は多分通らない。よし、上手くまとめられますかね…  
…っつと」

「上出来よ」

今決定している事項は、

【目的地】

瀬戸内海にある小島

【報酬】

貢献度に比例

【管理者】

アンバー＝レアベルト

【参加者】

アンバー＝レアベルト

かさおろしれいら

傘卸怜羅

しおつこね

詩桜琴音

「まあ、箇条書きだから分かり易いのは当然だけれど」

「一言多いぞ」

パレスについては今から聞いて、参加するかどうか確認してみよう。出来れば出て欲しいけれど。

そーいや今どこにいるんだ？ まだ食堂……じゃないだろうし。

部活？ は無いな。

PICの点検でもしてるのか、俺みたいはどこかで昼寝してんの

かもな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8024y/>

---

反比例のブローケン

2011年11月27日21時53分発行